

令和8年度保育学科，服飾美術学科

試験問題

国語

(試験時間60分)

受験番号	
------	--

受験上の注意

- 1 机の上には、「国語」の「問題冊子」1部と「解答用紙」1枚とが配付してあります。
「始め」の指示があるまでは、表紙の「受験上の注意」を読むだけで、「問題冊子」や「解答用紙」に手を触れてはいけません。
- 2 「受験票」を机の上に置き、筆記用具を準備しなさい。
「下敷き」の使用は認めません。
- 3 これは「国語」の試験で、試験時間は「60分」です。
- 4 「始め」の指示があったら、「問題冊子」と「解答用紙」に「受験番号」を記入してから、解答にかかりなさい。
解答はすべて「解答用紙」の所定の欄に記入しなさい。
- 5 印刷の不鮮明な箇所があったら、手を挙げて指示を受けなさい。
- 6 「やめ」の指示があったら、直ちに鉛筆などを置き、「受験番号」の記入漏れがないかどうかを確かめなさい。
- 7 試験開始後30分までは退室できません。
- 8 試験中の用便や試験開始30分以後の退室などには、手を挙げて指示を受けなさい。

問題一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(出題の都合上、一部改変した箇所がある。)

なぜ本が売れなくなってしまったのでしょうか。

しばしばその理由として「若者の活字離れ」が指摘されます。

しかしその指摘はまったく正しくありません。

というのも、若者は活字から離れているどころか、逆にかつてなく活字に触れているからです。メールやSNS、インターネットのサイトやブログなど、彼らはスマホやパソコンをつうじてつねに活字を読み書きしています。

年長世代だって、仕事や私用で、多い人では一日に何十通ものメールをやり取りしますよね。

メールの登場によって、私たちは人類史上最高とっていいほど手紙(メール)のやり取りをするようになりました。フェイスブックやツイッターといったSNSの登場はさらにそれに **A** をかけました。

それだけ現代の私たちは活字を読み書きしているということです。

本が売れないというところに「活字離れ」が叫ばれますが、実際にはまったく逆の事態が進行しているのです。

むしろ、ネットやメールなどをつうじて活字があふれすぎてしまったために、わざわざ **B**、というのが現状です。「活字離れ」ではなく、いわば「活字あふれ」で本が売れなくなっているんですね。

ニュースについても同じです。

いまやネットで主要なニュースを読むことができますようになりました。そのため、わざわざ新聞を買ってニュースを手に入れる

必要性が低下してしまいました。

実はここに、書籍や新聞の販売部数が低下している大きな要因があります。書物や新聞が活字や情報に触れるための特権的な媒体ではなくなってしまうんですね。その背景にあるのは「活字離れ」ではなく、あくまでも「活字の過剰」であり「情報の過剰」なのです。

この「活字の過剰」は書籍そのものの過剰によってもたらされています。

先ほど、出版市場は **C** しているのに書籍の刊行点数は **D** していると述べました。これは読者の側からすれば、次から次へと新しい本がだされるので追いつけない、という状況を意味します。

書籍を一つの消費財としてみたときに特徴的なのは、**E** する(つまり読む)のに時間がかかる、ということですが、

次から次へと本がだされても、一日は24時間しかないし、現代人はますます忙しくなっていますので、読みきれません。

ブランド物のバッグとかアクセサリなら、次から次へと商品がだされても、お金さえあれば使い捨てのように消費して、それに応えることができるでしょう。

しかし、消費に時間がかかる書籍のような消費財は、たくさん **F** されたからといって、その分市場が開拓されて消費が

G するわけではないのです。

書籍の供給が過剰になればどういったことが起こるのでしょうか。

当然、書籍の値が崩れます。つまりデフレですね。

2010年ごろの新書ブームとは、まさに出版市場における価格ハカイ^{注1}でした。それまでは2000円したような書物が新書に

なって800円程度で買えるようになったわけですから。

事実、全体でも書籍の平均単価は年々低下しています。簡単にいえば利益がでにくくなっているわけですね。新書ブームが起こったとき出版界はわきたちました。が、実際にはそれは出版市場のさらなる低迷へのレクイエム（哀歌）だったのです。

さらに言うと、供給が過剰になれば価値が低下する、というのは、書籍だけでなく情報そのものにも当てはまります。いまやインターネットをつうじて、日々、膨大な情報が供給されるようになりました。そしてその情報の多くが無料で^④閲覧できるものです。

そうになると、当然ながら、わざわざお金を払って情報を得ようとする人は減りますよね。無料の情報ですら、個人が絶対に読みきれない膨大な量が毎日毎日、供給されるわけですから。

よつぽど特定の情報源（たとえば特定の新聞や雑誌など）に価値を見出している人でないと、情報を得るためになかなかお金を払わなくなっているのです。

情報に対するこうした^①価値低下の圧力は、残念ながらあらがうことがほとんど不可能なものです。それどころか、出版社や新聞社などのメディア各社は、売り上げが落ちてしまった分をさらなる書籍や記事の配信によって補おうとするので、よけいに価値低下の圧力が生まれてしまっています。

^②情報に対する価値低下（売り上げの低迷）の圧力にあらがおうとすればするほど、情報が過剰になり、その圧力が逆に強まってしまうんですね。

ちなみに、供給過剰が価格低下を引き起こすというのは、日本経済を悩ませてきたデフレ現象とまったく同じ構造です。もちろんデフレの背景は複雑です。

が、出版市場における価格低下はデフレのメカニズムを理解するための一つのヒントを与えてくれています。

供給過剰がデフレの大きな要因の一つである以上、業務の効率化などで供給力をあげてもデフレがいつこうに解消しないのは当然といえば当然です。

実際、出版業界でも、ITの活用などによる効率化であまりに簡単に書籍が編集され出版されるようになったという供給力の上昇が、書籍そのものの価格低下を引き起こしました。

問題は、ここまで活字が過剰になり、書籍も過剰になると、書物そのものの性格が変わってしまうということです。

ネットなどをつうじた活字の過剰によって、書物はもはや知の特権的な媒体ではなくなりました。

また、書籍の過剰によって、書物は「ありがたいもの」ではまったくなくなり、逆に「場所をとるだけのもの」「処理に困るもの」になりつつあります。

かつては、百科事典や文学全集を居間や書齋に並べることが教養をあらわすインテリアとして（たとえ實用していなくても）

^③重宝された時代がありました。また、気に入った本の装丁をわざわざ自分で革製のものにかえる人や、「本だけは捨てられない」と巨大な書庫を自宅に設ける人も少なからずいました。

書物は知の象徴として物^④神的な価値をもっていたのです。

しかしいまではその物神性ははがれ落ち、邪魔なものとなり、書物もまた他の消費財と同じように大量生産・大量^⑤ハイキされる

ものになったのです。

かつてヴァルター・ペンヤミンは『複製技術時代の芸術』（1936年）のなかで、映画や写真など、複製できる芸術の登場によって芸術作品から「アウラ」が消えていくだろうと論じました。「アウラ」とはいわゆる「オーラ」のことです。

それを援用するなら、現代は書物から最後の「アウラ」がなくなりつつある時代だといえるかもしれません。

書物はもともと複製技術（活版印刷技術）によって生まれたので、絵画などの他の芸術作品と比べると、「いまここにしかない」という「アウラ」性は弱かったかもしれません。

とはいえ、それでも書物も作品である以上、そこには知の象徴としての「アウラ」がありました。それが書物の物神性へと結実していたのです。

しかし、ここまで活字や情報が過剰となり、書籍が簡単に、かつ過剰に出版されるようになると、書物はただのデータを運ぶ器の一つでしかなくなります。

複製技術の究極とは、すべてがデジタルデータになることです。デジタルデータであればいくら複製しても劣化しませんから。

その意味で、書籍を純粹にデータとして流通させる電子書籍化の流れは、サンピ^⑧両論あるにせよ、「アウラ」が消滅した書物にとつて歴史的な運命なのかもしれません。

（菅野稔人「社会のしくみが手に取るようにわかる哲学入門」より）

注1 新書 書物の形式の一。文庫本より大きく、B6判よりやや小さい版型で、軽い教養ものや小説などをおさめた叢書。

注2 物神的 人間みずからがつくりだした商品や貨幣がかえって人間を支配し、人間がそれらを神のように崇めること。

問一 傍線部⑦⑧⑨のカタカナを漢字に改めなさい。また、傍線部⑩⑪の漢字の読みを平仮名で書きなさい。

問二 空欄 A に入る最も適当な言葉を次の①～⑤から一つ選び記号で答えなさい。

- ① 面倒 ② 圧力 ③ 王手 ④ 拍車 ⑤ 馬力

問三 空欄 B に入る最も適当なものを、次の①～⑤から一つ選び記号で答えなさい。

- ① 活字によって思考したり、判断したりしてもきりがないとあきらめてしまっている
② 活字によって記憶しても知識を積み上げても無意味だとうんざりしてしまっている
③ 書物によって活字に触れたり、知識を得たりする必要性が低下してしまっている
④ 書物によって疑似体験したり追体験したりすることは不要だと思ってしまう
⑤ 多様なメディアを通じて音楽や映像を楽しむほうが効率的で楽しいと思っっている

問四 空欄 C～G に入る最も適当な言葉を、次の語群からそれぞれ選びなさい。ただしどの言葉も一度ずつ使うものとしします。

語群 〔拡大 縮小 消費 供給 増加〕

問五 傍線部(1)「価値低下の圧力」はなぜ生じるのか、文中の表現をできるだけ用いて二十字以内で答えなさい。なお、句読点や符号も文字数に含むものとします。

問六 傍線部(2)の状態にもっともよく当てはまる慣用句を次の①～⑤から選り記号で答えなさい。

- ① 焼け石に水 ② いたちごっこ ③ 火に油を注ぐ ④ しのをげずる ⑤ 後の祭り

問七 次に示すのはこの文を読んだ後の、話し合いの様子です。これを読んで、後の問い i・ii に答えなさい。

生徒 A 「若者の活字離れ」という言葉を疑ったこともなかったけれど、たしかに、逆に活字にあふれているね。

生徒 B そうだね。過剰な活字や情報によって、書物や新聞が **X** (六字) ではなくって **Y** (六字) してしまっ

た結果売れなくなったという説明は本当にわかりやすかったよ。

生徒 C 書物から消滅した「アウラ」とは、**Z** (十五字以内) 価値」ということだね。読書が趣味の僕としては「た

だのデータを運ぶ器の一つ」と言われると、少し残念な気もするよ。

i 空欄 **X・Y** には当てはまる言葉を、それぞれ六字で本文中より抜き出して答えなさい。

ii 空欄 **Z** に当てはまるように、本文中の語句を用いて十五字以内で答えなさい。

問題二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

生きる 谷川俊太郎

生きているということ

いま生きているということ

それはのどがかわくということ

木もれ陽がまぶしいということ

ふつとあるメロディを思いたすということ

くしゃみすること

あなたと手をつなぐこと

生きているということ

いま生きているということ

それはミニスカート

それはプラネタリウム

それはヨハンII シュトラウス

それはピカソ
それはアルプス

すべての美しいものに出来るということ

かくされた悪を注意深くこぼむこと

生きているということ
いま生きているということ
泣けるということ
笑えるということ
怒れるということ
自由ということ

生きているということ
いま生きているということ
いま遠くで犬がほえるということ
いま地球が回っているということ
いまどこかで産声うぶごえがあがるということ

いまだどこかで兵士が傷つくということ
いまだらんこがゆれているということ
いまだいまが過ぎてゆくこと

生きているということ
いま生きているということ
鳥ははばたくということ
海はどどろくということ
かたつむりははうということ
人は愛するということ
あなたの手のぬくみ
いのちということ

13歳のわたしは格闘していた。
教室のなかで。

国語の教科書を机のうえにひろげて。
そこにあったこの詩が、のみこめなかつたから。
わたしは小学生のころから詩が好きだった。

詩を読んで、日常生活では味わったことのない感情にこころがふるえることが不思議でこわかった。たましいをわしづかみにされるようなところの激震を、くりかえし実験のように再現して味わうのが好きだった。そしてそれらの詩を、意味もわからないままにノートに書きうつすことに熱中した。理解ぬきで筆写するのだから、ほとんど呪術の領域である。わたしにとって詩は、危険なあのがれのタイシヨウだった。

でも、この詩はちがっていた。こころがふるえなかった。危険ではなかった。危険でないということは、魅了されないということである。なぜそうなのか、13歳のわたしにはケントウもつかなかった。

国語の先生は、詩のなかの「ヨハン・シュトラウス」や「ピカソ」といった単語につけられたかんたんな脚注を読みあげたあと、さらによくわしく解説してくれた。ヨハン・シュトラウスがどんなワルツを作曲したか、ピカソがどんな絵を描いた人なのか。それでもなお、ヨハン・シュトラウスにもピカソにもなんのイメージもわかかなかった。どこか遠い国の、知らない人であった。

13歳のわたしにとって「音楽」とは自分の好きな音楽のことであり、「絵画」もおなじく自分のいいと思う絵のことではなかった。先生はつづいて、「木もれ陽」や「こぼむ」といったことばを辞書でしらべると言った。だからわたしも、あたらしい同級生たちとおなじように辞書をめくるふりをしたが、それらのことばの意味はすでになんとなくわかっていたし、あらためて辞書をひいてはつきりさせたいとも思っていなかった。そのときわたしは、ほかのことで頭がいっぱいだったのだ。

この詩にこころがふるえない自分が不可解だった。

この詩がとるにたりない詩であって、詩のほうにわたしを魅了する力がないとは考えられなかった。なぜならこれは、『中学校国語二』という教科書の、最初の単元のポウトウに掲載されている詩だからだ。詩を読む力だつてバツグンにすぐれているはずのどこかのえらい先生たちが「生きる」をいい詩だと思わなかったら、ここにこのように掲載されているわけではない。はつきりことばでそんな理屈を考える能力はなかったが、バクゼンとそう感じたのである。

ならば、日ごろ詩が好きで詩のよさを感じることができていたはずの自分のほうに、この詩のよさをわかる力がなかったということになる。

⁽²⁾ このとき味わった疎外感⁽²⁾は重く、いやな感じのものだった。

授業のつづきはほとんどどうわのそらで書き流してしまった。

わたしは自分のこころと格闘していた。

でも、自分自身と正式な格闘をはじめには、わたしはまだ幼すぎた。だからやつあたりのように教科書をにくんだ。国語なんてつまらないと思った。

⁽³⁾ この詩にこころがふるえなかった理由を、いまならことばにして考えることができる。

この詩は、詩に出会いたての中学生の理解力で「こなせる」ほど手軽な詩ではないのである。それどころか、詩の初心者である子どもにあたえるのにもっとも向かないタイプの詩だと思う。

その理由は、ヨハン・シュトラウスやピカソに代表されるような「おとなの一般常識」⁽⁴⁾をあてにしなければ、この詩は読む人に伝わらないからである。

問一 傍線部⑦～⑩に相当する漢字を含むものを、次の各群の①～④のうちから、それぞれ一つ選び記号で答えなさい。

⑦タイシヨウ

①ムシヨウの愛をくれる人

①ケントウ

①トウトツな発言をする

②シヨウメイ器具をとりかえる

②それはダトウな判断だ

③キシヨウ衛星を打ち上げる

③シュウトウに準備する

④名誉シヨウゴウを贈られる

④現実からトウヒする

⑧ポウトウ

①ポウクンによって政治が乱れた

⑤バツグン

①樹木をバツサイする

②過去をポウキヤクする

②ザイバツの令嬢と知り合う

③流行性のカンポウにかかる

③神のシヨバツを受ける

④今朝はネポウしてしまった

④代表をセンバツする

⑨バクゼン

①サバクの景色を見る

②ジュバクから解き放たれる

③観客がバクシヨウする

④バクマツの歴史を学ぶ

問二 傍線部④⑤⑥のことばについて、それぞれの意味ではないと思われる最も適切なものを一つ選び、記号で答えなさい。

④とるにたりない

①有象無象

②春蛙秋蟬

③枝葉末節

④一日千秋

⑤うわのそら

①あてにならないこと

②心が奪われること

③適当なこと

④落ち着かないこと

⑥やつあたり

①とばっちり

②憂さ晴らし

③当たり散らす

④腹いせ

問三 傍線部①「ほかのこと」とはどのようなことですか。文中のことばを使って説明しなさい。

問四 傍線部②「このとき味わった疎外感」の説明となるように、次の空欄X・Yに文中から抜き出して答えなさい。

X (二十字以内) Y (二十五字以内)
れているような気持ち。

問五 傍線部③「この詩にこころがふるえなかつた理由」とは何ですか。その理由を、四十字以内で答えなさい。

問六 傍線部④「一般」の対義語を漢字二字で答えなさい。

問七 詩中の [] にはいる接続詞を、次の①～⑤の中から選び、記号で答えなさい。

- ①しかし ②そして ③それは ④また ⑤例えば